2012年
11月8日
木曜日

星の王子さま

本郷 亮　准教授（経済学史）

サン＝テグジュペリの『星の王子さま』（*Le Petit Prince*, 1943）という物語に、星が輝いているのは各人が自分の星を見つけるためだ、という言葉がある。しかし残念ながら、この種の目的論的説明は、現代科学では誤りとされる。科学とは実に恐ろしいものであり、例えばその教科書によれば、宇宙はビッグバンという偶然によって生じ、地球や太陽の誕生も偶然であり、何億年か先には太陽が膨らんで地球を飲み込むらしいのだが、これもまた偶然である。偶然だから、何の意味もない（＝ナンーセンス）。私はこの世界観を科学的には認めざるをえないが、その一貫した無意味さをとても不気味に感じる。ふるさとも性別も結婚も、障害も病気も事故も、地震も津波も、なにもかも偶然である。私たちは偶然に弄ばれる存在でしかない！

「人間はね、急行列車で走り回っているけれど、何を探しているか自分でもわかっていない。ただ忙しそうにぐるぐる回るばかりなのさ…」。生物の本にはＤＮＡのことは載っているが、生きる意味は載っていない。生きることや死ぬことの意味はどこに見出されるのか？想像力（心の目で見る力）を失わなければ、ここにも、そこにも、すぐ見出せるはずである。それは一種のおとぎ話を創作する力、自由に意味を創り出す力であり、知識のない子どもの方が、かえってこの力に長けている。意味を見つけるのが上手な人は、不幸にも意味を見つけるかもしれない。そういう人はたとえ不幸でも、心にいつも慰めがあるだろう。この世界に意味を与えるものは何か？それは皆さん一人一人の能動的精神のほかにはない。

人生の意味とは、要するに「人生の目的」のことである。目的のない人生とは、喩えて言えば、的を定めずに矢を射る、あるいはゴールを定めずに走るようなものである。その場合、どこに向けて射ようが、どこに向かって走ろうが、ある意味では常に正しい。なぜなら、「正しい／誤り」（right／wrong）という概念は、目的に照らさなければ判断不可能だからである。例えば「正しい道」とは、目的地に通じる道のことであり、「誤った道」とは、目的地に到達できない道のことである。これをより一般化して言えば、ある行為（そして行為の集まりが人生）が正しいか否かは、何らかの目的に照らさなければ判断不可能である。

科学知識は、どれほど発展しても人生の「目的」の代わりにはなりえず、むしろその「手段」にすぎないだろう。もし人生の「目的」を与えてくれるものを広く「宗教」と呼ぶならば、人生には、科学と「宗教」の両方が必要になるだろう。それぞれの領分があり、どちらか一方だけで済むような問題ではないだろう。

さて、王子は自分の星を飛び出した後に、色々な星の住人の「宗教」を見て回った。①権力志向の王様、②人から賞賛されたくてたまらない「うぬぼれ屋」、③ペシミストの酔っぱらい、④底なしの所有欲をもつ資本家、⑤律儀な労働者、⑥知識を追求する学者。そして王子はついに地球にやって来て、そこで自分自身の「宗教」を見出した。いや、決断したと言うべきだろう。本物の「宗教」とは、常にそのような人生の決断を伴うものである。■